

ビジターセンターのインフォメーションカウンターの研究

永田 和輝（帝京科学大学 環境教育・インタープリテーション研究室）

指導：古瀬浩史

キーワード：ビジターセンター、カウンター構造

1. はじめに

ビジターセンターとは、自然公園において、その土地の自然、動植物などの情報を展示、公園の利用案内を行っている施設のことを指す。それらの業務のために、地域の情報を収集し、調査・研究を行い、自然体験などのプログラムも提供している。ビジターセンターは1950 年頃アメリカの国立公園で生まれ、1963 年日本に初めてビジターセンターが設立された*1。

インフォメーションカウンターはビジターセンターの一角に設置される、来訪者の案内のための場所である。来訪者に公園での直接体験を促し、よりよい公園の利用が行われるための情報を提供する重要な場所である。そして、ほぼ例外なくすべてのビジターセンターにインフォメーションカウンターが設置されている。インフォメーションカウンターは、公園関係者と来訪者の間の重要なインターフェースであり、コミュニケーションを活発化させる構造を持っている必要がある。ビジターセンターのインフォメーションカウンターの構造について記述した資料としては、環境省の技術指針があるが*2、概要的な文章での記述と、ユニバーサルデザインに関する記述にとどまっている。

本研究ではビジターセンターのインフォメーションカウンターの構造を調査し、どのような課題があるか検討し、よりよいインフォメーションカウンターの構造を考察する。

2. 方法

調査対象として、以下の関東地方と中部地方の自然公園施設 12 館を調査対象とした。

- ・八ヶ岳自然ふれあいセンター
- ・奥多摩ビジターセンター
- ・高尾ビジターセンター
- ・鳥羽ビジターセンター
- ・藤前活動センター
- ・稲永ビジターセンター
- ・野鳥観察館
- ・香嵐渓ビジターセンター
- ・豊田自然の森ネイチャーセンター
- ・大和市自然観察センター
- ・三輪の森ビジターセンター
- ・山のふるさとの村ビジターセンター

調査内容は①インフォメーションカウンターの高さ・横幅・奥行き測定、形状の記録、

②施設職員を対象に現在のカウンター構造についての問題点の聞き取り、カウンターの設置年、カウンターの改変の有無を調査、

③アメリカのビジターセンターについてインターネット上の写真と現地で撮影された写真を使用し、日本と比較、を行った。

3. 結果

①インフォメーションカウンターの構造

カウンターの形状は2種類に分類することが出来た。一つは、壁で仕切られた部屋に窓が開けられ、窓にカウンターが一体化しているもの。これを窓型とする（図-1）。2つ目は、壁とは独立したカウンター構造をとっているもの、これをオープン型とする（図-2）。



図-1 窓型カウンターの事例



図-2 オープン型カウンターの事例

今回の調査で 12 件中 7 件が窓型のカウンターが設置されていた。(図-3)

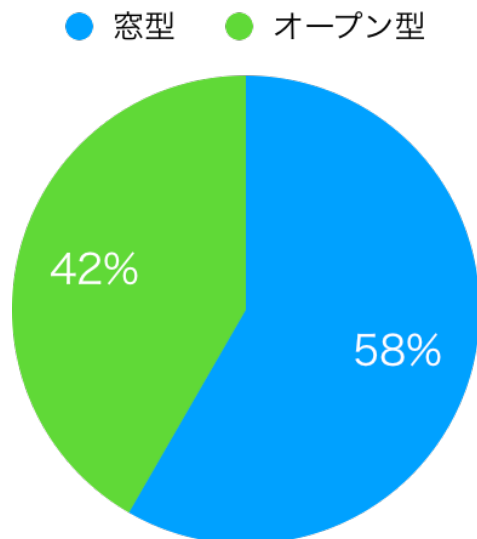


図-3 カウンター構造 (n=12)

インフォメーションカウンターの構造を、2000 年の前と後に分けて比較すると、1980-2000 年までに設置されたビジターセンターのカウンター構造では窓型の設置の割合が多く、2001-2021 年では窓型とオープン型の割合は同じだった。(図-4)

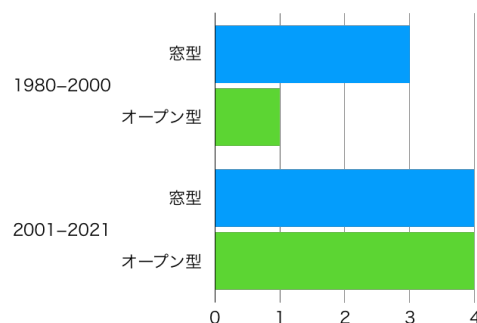


図-4 設置年代別カウンター構造

インフォメーションカウンターの高さについての結果を図-5 に示す。一番大きな割合をしめていたのは 90-99cm であり、大人が立ってコミュニケーションを取るには適切な高さと考えられた。

また、子どもなどに対応するための低い部分をもつカウンターが 12 件中 2 件確認出来た。(図-6)

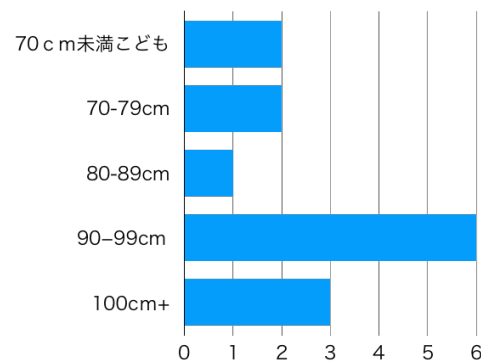


図-5 カウンターの高さ



図-6 高さの異なるカウンターを有する例

インフォメーションカウンターの長さについての結果を図-7 に示す。200-249cm が一番多く 7 件だった。また、150cm 未満の短いカウンターも 5 件あった。

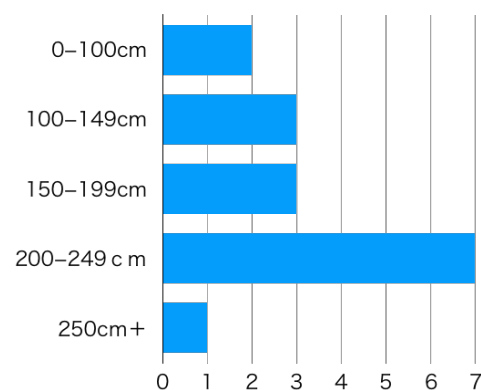


図-7 カウンターの長さ

インフォメーションカウンターの奥行きについての結果を図-8 に示す。一番多かったのは 30-39cm で 6 件であった。パンフレットの一般的なサイズは A4 が基本とされており、パンフレットを置くには十分な寸法と言える。しかし、大型の地図などを広げるには奥行きが足りないと思われる。

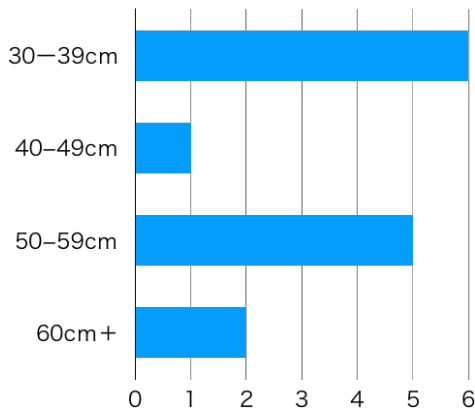


図-8 カウンターの奥行き

環境省の技術指針ではユニバーサルデザインのカウンターの構造は、「一部を高さ 70-80cm カウンター下部に膝が入る高さ 60cm 以上奥行き 45cm 以上のスペースを設けカウンター前面には、車椅子使用者の回転等を考慮し 150cm X 150cm 以上の広さを確保する」との記載されている²⁾。今回の調査でこの基準を満たしていた施設は山のふるさとの村ビジターセンターの 1 件のみだった。(図-9)



図-9 山のふるさとの村の低いカウンター

②インフォメーションカウンターの改変履歴

今回の調査でビジターセンター開設以降にカウンター構造を窓型からオープン型に仕様変更した施設が 12 件中 2 件確認された。

山梨県の八ヶ岳自然ふれあいセンターで、1990 年の設立時に使われていたカウンターは高さ 105cm、横幅 215cm、奥行き 21-37cm の窓型のデザインだったが、2001 年に現在のカウンター構造に改変し、高さ 92cm、横幅が 225cm、奥行きが 50cm のオープン型のカウンターが設置された(図-10)。増設された理由としては「事務室でお客さんが声をかけづらく距離が遠く感じていたため」が挙げられていた。後付されたカウンターは新たに設計されたものではなく、近接施設で不要となったカウンターを再利用したとのことである。また、カウンターの高さが子供には高いため、子ども用の 20cm の踏み台が設置されている。



図-10 八ヶ岳自然ふれあいセンターのカウンター

山のふるさとの村ビジターセンターは 1994 年に設立され、窓型のカウンターが使われていた。しかし、カウンターでの来訪者とのコミュニケーションが難しいとの意見があったため、1997 年に現在使われている高さ 90cm、横幅 244cm、奥行き 50cm のオープン型カウンターが作られた(図-11)。また、同時期に子どもや車椅子に対応可能な高さの低いカウンターも作られた。



図-11 山のふるさとの村ビジターセンターのカウンター

③海外事例

11 件のアメリカの国立公園のカウンターの構造を画像等で調べたが、アメリカの国立公園には窓型のインフォメーションカウンターは確認できなかった。また、ほぼすべてのインフォメーションカウンターが広々とした作りで、ユニバーサルデザインに配慮した、異なる高さのカウンターが設置されていた(図-12)(図-13)。



図-12 アメリカのビジターセンター（グランドキャニオン国立公園）



図-13 アメリカのビジターセンター（グランドキャニオン国立公園）

4. 考察

今回調査した日本の施設では窓型のカウンター構造を使用している施設の割合が多く、全体的にカウンター構造が小さく感じられた。特に古い施設でこの傾向があり、窓型からオープン型の仕様に変更されつつあるのかもしれない。窓型のカウンターが多く造られたことは、施設に勤務する職員の数の少ないことと関係していたかもしれない。高さや奥行きなども含め、全体として来館者とのコミュニケーションを促進しようとするデザインの配慮が少ないように思われた。これらの理由として、日本では新しくビジターセンターを建設するに伴い施設のデザインする上で、過去の経験や現在の現場の意見が反映されにくい状況があるのではないかと想像される。このことは施工者だけでなく、設置主体や運営主体が多様であることと関係しているかもしれない。

来訪者とのコミュニケーションはビジターセンターの基本的な機能であり、インフォメーションカウンターはそのインターフェースとして非常に重要である。今後、構造についての議論やノウハウの蓄積を通じてデザインを再考していく必要があると考える。

参考文献

- 1) 古瀬浩史：地域博物館としてのビジターセンター、

博物館研究,55 巻;p6-p7,2020.

- 2) 環境省－自然公園等施設技術指針